

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653190

研究課題名(和文)「なまはげ」風習の臨床心理学的研究

研究課題名(英文)Clinical psychology research on NAMAHAIGE custom.

研究代表者

笠井 孝久(Kasai, Takahisa)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：40302517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、子どもたちがなまはげ行事によって感じる恐怖の性質を明らかにした。子どもたちはなまはげに対して強い恐怖を感じるが、それらは一過性のものでトラウマにならない。その要因は、なまはげが神性をもつ存在として、地域住民の生活の中に位置づけられているという文脈によるものと考えられる。また、恐怖の感じ方、表現は年齢による変化があることが明らかになった。なまはげ行事は、子どもたちに恐怖とどのように向き合い、どのように統制していくかを体験させる機会となっていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the character of the fear which children feel in NAMAHAIGE event. Although children feel strong fear to NAMAHAIGE, these experiences are transient and do not become a trauma. It will be because NAMAHAIGE is positioned as existence with deity. Also, it is suggested that the degree which children feel fear, and styles of the expression changes along with growth. As a conclusion, it is suggested that NAMAHAIGE event provides children with an opportunity to face and to control fear appropriately.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理学的介入 恐怖感 トラウマ

1. 研究開始当初の背景

秋田県男鹿地区の「ナマハゲ」風習では、鬼のように姿をしたナマハゲが村の家々を周り、「泣く子はいねーがー」と幼い子どもたちを脅し、恐怖に陥れる。扉や壁を叩く大きな音や叫び声、ナマハゲの異様な姿は、幼い子どもたちには強烈な恐怖として感じられるだろう。事故や災害などで強烈な恐怖を経験した場合、それがトラウマとなって日常生活に様々な影響を及ぼすことがある。ナマハゲによる恐怖はトラウマにならないのだろうか。トラウマにならないとすれば、この恐怖は事故や災害による恐怖とどのような点がことなるのだろうか。

ナマハゲ行事が伝統として続いている背景には、それに関わる人々に何らかの意味を持っているに違いない。特に、ナマハゲ行事の“子どもに恐怖を与える”という特質は、どのような意味があるのだろうか。臨床心理学の立場から「ナマハゲ」行事が子どもに与える影響を検討することは、「恐怖」に関連する子どもの人格発達に対して有用な知見を得られるのではないかと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、秋田県男鹿地区の「なまはげ」の風習を取り上げ、その経験が子どもの人格発達にどのような影響を及ぼすのかを検討するものである。架空の存在を介在させ、意図的に恐怖感を与えることが、子どもの人格発達にどのような意味をもつのか、「なまはげ」を体験した子どもたちや保護者を対象に以下の3点について検討する。

子どもが「ナマハゲ」をどのように経験し、どのようなイメージ・感情を形成するのか、またそれらはどのように変遷していくのかを明らかにする。

子どもの恐怖体験のイメージの変遷に影響を与える要因について探索する。
恐怖体験が子どもの人格形成にどのよう

な影響を与えるのかを考察する。

3. 研究の方法

本研究は(1)DVD資料の分析、(2)ナマハゲ行事の観察、(3)ナマハゲについてのインタビュー調査の3つの部分から構成される。それぞれの方法は以下の通りである。

(1) DVD資料の分析：

<方法> 男鹿市教育委員会生涯学習課の協力を得て、文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業実行委員会が制作したDVD「男鹿のなまはげ 25地区の映像アーカイブ」(平成23年12月31日収録)と「男鹿のなまはげ 25地区の映像アーカイブ」(平成24年12月31日収録)を視聴し、ナマハゲ行事の際の子どもたちや家族の反応を分析した。
<日時・場所> 平成24年2月21日(15時~17時)および平成24年7月6日(14時~16時)。男鹿市役所若美庁舎内ジオパーク学習センターにて視聴した。

(2) ナマハゲ行事の観察：一般家庭のナマハゲ行事に参加しながら、子どもや家族の様子を観察、録画し、その特徴などを分析した。
<手続きと方法> 男鹿市X地区のなまはげ行事に関与している方に調査の趣旨を説明し、協力を依頼できる家庭(W氏)を紹介してもらった。観察に先立ち、書面と口頭により調査の趣旨と方法、個人情報保護についての誓約等を説明し、調査協力を依頼し、同意を得た。その後、W氏宅にて、ナマハゲ行事を観察した。

<日時・場所> 1回目：平成24年12月31日、2回目：平成25年12月31日。場所は男鹿市内W氏宅。

(3) インタビュー調査

<調査協力者の選定> X地区：ナマハゲ行事を行っている地区にあるY小学校に研究の趣旨を説明し、保護者会で協力者を募っていただいた。協力可能性のある家庭に対し、趣旨説明書およびインタビュー調査の計画を

学校を通して渡してもらい、承諾していただける場合は、承諾書を筆者に返送してもらった。その結果、2家庭で協力が得られた。

Z地区：ナマハゲ行事の維持、推進にかかわっている男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班に連絡をとり、研究趣旨を説明し、調査協力者の紹介を依頼した。その結果、6家庭から調査の協力が得られた。

<方法> 調査協力を承諾していただいた家庭と日程を調整し、それぞれの家庭を訪問して、インタビュー調査を行った。調査に際して、あらためて調査の趣旨、方法、個人情報保護についての宣誓等を説明し、了解を得た。すべての家庭で、子どもと保護者を同席でインタビューを行った。

<日時・時間>

平成25年7月～8月。インタビューは調査協力者の自宅（男鹿市内）で行った。

4. 研究成果

(1) DVD資料の分析

ナマハゲに対する反応：子どもたちの反応は、いくつかのパターンでとらえることができる。

・泣き叫ぶ ・家族にしがみつくと固まって動かなくなる

・逃げ回る、隠れようとする ・ナマハゲの動きに合わせて対応する(ex. ナマハゲの問いかけに応答する、自ら「いい子にしています」と申告する、酒をつぐ等)

これらの反応は、ナマハゲの動きによっても影響される。例えば、子どもを捕まえに来るナマハゲの場合、ナマハゲから逃げ回ったり、家族にしがみついたりすることが多い。一方、言葉での問いかけを主とするナマハゲに対しては、身体を緊張させつつも言語的な応答をすることが多い。

年齢による反応の違い：年齢区分と反応の特徴はおおよそ以下のようである。映像では、子どもの年齢が示されていないので、見た目

や言動で、だいたい何年生くらいと筆者が判断して区分した。

幼児

3歳くらいまでは、物音や見慣れぬモノに対する怖さで泣いているようで、ナマハゲの意味を理解して怖がっているわけではないようだ。より年少の子どもでは、キョトンとした表情でナマハゲを見ている場合もある。

3歳より上になると、幼児は親にしがみついて泣き叫ぶ。恐怖反応のピーク（見た目の激しさ）は4～5歳くらいだろうか。安心できるものとそうでないものの区別などができてきたので、ナマハゲの異質性に対して反応も大きくなるのではないかと考えられる。ナマハゲは実在の恐怖対象としてとらえられている様子がうかがえる。

低学年の児童

幼児期に比べ、強烈に泣き叫ぶような反応は少なくなる。しかし、逃げようとしてナマハゲに捕まって暴れる子どももいる。両親や家族の膝の上や横に座らされて、ナマハゲに対応しようとする子どもも増えるが、表情が固く、目が泳いでいるような、あるいはじっとナマハゲを見つめ恐怖感を抑えているように見受けられる。怖さを克服しながら、子どもなりにナマハゲ行事に参加しようという意思を感じさせる。

ナマハゲの問いかけに「はい！」と緊張した様子で答えたり、酒をついだりする子どもが増えて来る。自分から「いい子です」「いうこと聞いてます」「ごめんなさい」と申告する子どももいる

中学年くらいの児童

もう少し大きくなると、ほとんどの子どもがナマハゲに対応できるようになるが、その表情は硬い。泣き叫ぶ子どもはほとんどいない。ナマハゲが帰った後で、表情を緩め、安堵感を表現する子どもが多く、ホッとして親に抱きつく子どももいる。

「全然、平気」という感じでナマハゲに

対応してたが、酒をついでいるときに、ナマハゲがちょっと動いたらビクッとしているような子どももいた。ナマハゲがいる間は頑張っているが、かなり緊張している様子がかがえる。

周囲の大人たちの反応：大人の対応にもいくつかの特徴が見られた。1点目は、子どもを守り、かばうような言動である。「宿題、ちゃんとやってるか」といったナマハゲの問いに対して「ちゃんとやってるよな」、「言うこと聞いている」等と返答し、子どもをかばう発言が多く見られた。また、大泣きしたり、親にしがみついたりする子たちには、なだめたり、膝に乗せて抱きしめたりして安心感を与えている。2点目は、ナマハゲの意味づけである。大人たちはナマハゲを、災いを祓い、来年の福をもたらす神的な存在として意味づけている。なので、ナマハゲの来訪に感謝し、酒や膳でもてなしをする。このような大人の姿勢がナマハゲの怖さを単なる恐怖としてではなく、別の文脈のなかで理解する仕組みにもなっている。

子どもたちが怖がるにもかかわらず、大人たちは安心感を与えるような関わりをしながら、子どもたちに行事への参加を促している。子どもが怖がっても、逃がしたり隠したりせず、ナマハゲへの応答をさせたり、お酌をさせたりと、少しでもナマハゲと関係する機会をもたせようとする。子どもたちを儀式に参加させようというこのような営みは、大人たち全体がナマハゲ行事を子どもにとって意味のある事柄（例えば、子どもに自覚を持たせるため。地域社会の一員となるための通過儀礼）として経験させようという気持ちの現れであろう。

大人たちの行為の背景にある思いやナマハゲ行事の意義は、子どもたちの感じる恐怖に影響を与える可能性がある。まったくの無力な存在として取り残される恐怖ではなく、大人たちに守られながら感じる恐怖、ナマハ

ゲ行事という文脈の中で感じる恐怖は、子どもたちにそれらに対応する余地を残す。このことはナマハゲによる恐怖が、圧倒的な恐怖体験として心の傷になる可能性を低めていると考えられる。

(2) ナマハゲ行事の観察

2年にわたってナマハゲ行事を観察し、幼児期のナマハゲに対する反応の一部が理解できた。以下に特徴を列挙してみる。

- ・ 1回目（V：1歳10ヶ月）は、激しく泣き叫ぶが、主に視覚的な異様さやナマハゲの出す大きな音や叫び声に反応しているようだ（ナマハゲ来訪の意味等はわかっていない）。回避したり抵抗したりする様子は見られず、泣き叫ぶことしかできないようであった。その様子を見かねて、母親は祖母が抱っこしてあげていた。2回目（2歳10ヶ月）になると、自分から母親に抱きつき、「あっち！」と回避行動をとろうとするようになった。
- ・ 1回目も2回目も、ナマハゲから目を逸らすばかりでなく、ナマハゲに対する関心もあり、ナマハゲの言動や所作に注視している様子が見られた。ナマハゲが危険を及ぼさないか、危機の程度がどれくらいなのか、を確認しようとしているかもしれない。
- ・ まったくのパニック状態になってしまうわけではなく、両親の言葉かけやナマハゲからの言葉かけにも反応する部分を残している。
- ・ 恐怖感の持続は、それほど長くはなく、ナマハゲがいなくなれば比較的速やかに落ち着きを取り戻す。ナマハゲがいる間も、行動パターンが明らかな場合（問答の最中など）は、少し冷静さを保てる。
- ・ 行事の最中から行事の後まで、子どものナマハゲに対する対応を家族が支援している（ex.頑張ったことを褒める、両親が守ると伝える、いい子でいれば大丈夫などと伝える）。

・行事の終了後、子どもなりに気持ちを整理する行動があるようだ。Vの場合は、一人で黙々とおもちゃで遊び始めたり、母親の箸を隠すことなどがそれにあたると考えられる。

Vの恐怖の表現は、「ギャーッ」と大泣きし、母親に助けを求める、その場を離れようとするというごく一般的なものと言えよう。このとき周囲の大人は、子どもを助けつつも、ナマハゲに対応するよう促している。恐怖を排除、回避させるだけではなく、恐怖を自分の行為と関連するものとして意味づけるような（「いい子にしていれば、怖くない」）働きかけをしていることに特徴があり、それは、今、体験している恐怖を単なる恐怖として体験させない働きをもっていると言えよう。

また、2回目のナマハゲが帰った後のVの行動も特徴的であった。Vは家族から離れ、一人で自分の好きな遊びに没頭し、その後、母親を困らせるような行動をとる。ついさっき体験した恐怖感や親に対する不満、不信感などをそのような形で表現しているように思われた。インタビューをした子どもたち（次節参照）の多くに、怖さを表現することにためらいをもっているように感じられたように、3歳になる前のVも同じような感情をもったのではないか。このためらいがどのような感情から生じて来るのかは明らかではないが、恐怖の対象に対する自己の劣等性や無力感などに関連があるのではないか。

(3) インタビュー調査

子どもたちのインタビューから、ナマハゲについての認識、ナマハゲによる恐怖、トラウマ的要素、ナマハゲの効果、日常生活のナマハゲ、保護者にとってのナマハゲ、という観点でナマハゲの影響を検討した。

ナマハゲについての認識：多くの子どもたちがナマハゲ来訪の意図や所作などに対して共通の認識を持っていることがわかった。

年齢が高くなると、ナマハゲは人が扮していることも理解している。また、ナマハゲに対して憧れや自分たちがその伝統を守っていかこうとする気持ちをもつ子どももいる。これらの認識は、家族からの影響によるところが大きいと推察された。

ナマハゲによる恐怖：多くの子どもがナマハゲに対して恐怖心を抱いていることが分かる。子どもからは「怖くない」という返事が返ってきても、保護者に聞くと怖がっている（緊張している）様子がうかがえた。年長になると、「怖い」というより、「緊張する」という感じになるようだ。恐怖感や反応のしかたには、個人差とともに、ある程度の発達の差異があると考えられる。

トラウマ的要素：ナマハゲが帰ったあとも、日常生活にまで影響を及ぼすことはほとんどない。

ナマハゲの効果：ナマハゲによる恐怖は一過性の性質が強く、ナマハゲが帰ると子どもたちはホッとしている。しかし、日常でも家族から「ナマハゲが来るぞ」と注意されると、一瞬行動を統制するということはあるようだ。しかし、これも小学校入学後にはあまり効果がなくなるようだ。また、ナマハゲが来訪した際に家族がとる、子どもを守る行動は、子どもたちの家族への信頼感に影響を及ぼしている。

日常におけるナマハゲ：多くの家族が、日常でも「ナマハゲが来る」という言葉で子どもたちに注意をしている。就学前の幼児の多くは、普段でも「ナマハゲが来るかも」と思っているようだ。

保護者にとってのナマハゲ：多くの保護者が幼い頃、ナマハゲを経験しており、一様に「怖かった」と述べている。自分たちも怖さを経験しているので、保護者から言われる「ナマハゲが来るぞ」という言葉は、リアリティを含んで子どもたちに伝わるのではないか。また、多くの保護者がナマハゲ行事に

意義を認めており、子どもたちがナマハゲを経験することや行事を存続させることを願っていた。

<まとめ>

- (1) ナマハゲによる恐怖の特徴として、文脈に支えられた恐怖体験、恐怖感の発達的变化、恐ろしさからうしろめたさへ、の3点をあげた。
- (2) トラウマ化させない要因として、神事としてのナマハゲ行事、地域のナマハゲ認識、再現性/繰り返し、をあげ、そのような要因により、ナマハゲ行事が恐怖に対応する経験として位置づいていることを明らかにした。
- (3) 子どもが恐怖を経験するナマハゲ行事、災害・事故、虐待を構造的観点から比較を試みた。
これらの恐怖の違いを生じさせる特定の要因を明らかにすることは難しいが、ナマハゲの構造的要因の組み合わせは、恐怖を軽減する、あるいは恐怖を扱うるものにする可能性を示唆した。

	災害・事故	虐待	ナマハゲ
意味(文脈)	×		
制御可能性	×		
周囲の意味づけ	×	× or	
恐怖対象との関連	外 (無関係)	内 (身内)	外 (部外者)
周囲の介入/とりなし	×	×	
反復性/予測可能性	×		
非日常性		×	
非現実性	×	×	

5. 主な発表論文等

〔図書〕(計1件)

笠井孝久 千葉大学教育学部 「なまはげ」風習の臨床心理学的研究 2014 64頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠井 孝久 (KASAI, Takahisa)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：40302517